

# 食と記憶の研究

## その現状と展望について

寛ボルテール（倫理研究所専門研究員）

### はじめに

近年、日本の各地で学校給食を提供しているレストランが次々と開店し、都内だけでも数件あるとのことである。台東区のある人気店は、1階は大人の香りの漂うバーになっているが、2階に上がると、雰囲気がかかりと変わり、小学校の教室のような内装になっている。壁にかけられた黒板にチョークでメニューが書かれており、その前には教師がすぐにでも使えそうなスチール製の教卓が置かれている。そして「教室」の真ん中には小学生用の低い椅子と机が置かれ、客はそこに座り食事をとることになっている。

この店のランチは、以下のようなメニューがある。

ソフトめん、ミートソース

ミニサラダ

味付け牛乳

（コーヒー、ココア、イチゴ、メロン、バナナ、キャラメル、抹茶きなこ）

もう少し豪華な「スペシャル給食」を注文すれば、次のような献立が出てくる。

あげばん

（さとう、ココア、きなこ、シナモン、カフェラテ）

ソフトめん、ミートソース、カレーシチュー

肉だんごスープ

春雨サラダ

くじらの竜田揚げ

味付け牛乳

（コーヒー、ココア、イチゴ、バナナ、抹茶きなこ、キャラメル）

夜は牛乳が冷凍ミカンに変わる

当然ながら、皿やお椀は学校給食で使われているアルミ製のもので、客はバットをトレイ替わりにして食べるのである。

前述のメニューを見て、なんとなく なつかしい、食べてみたい と思われるのではないだろうか。また、「あげばん」あるいは「ソフトめん」という文字を読んだだけで、昔食べた給食だけではなく、小学生であった頃の自分まで思い出し、担任の先生の顔や同級生と過ごした時間、授業の様子など、様々な記憶も同時に蘇るのではないだろうか。

昭和時代に小学校を過ごした人ならば、前述のような給食の記憶を持ち、共有しているに違いないし、そうでない人、肉団子スープやくじらの竜田揚げをまったく食べなかった人にとっても、給食に対しては同じようなイメージをもっているのではないだろうか。

食べ物が過去を蘇らせるといえば、フランスの作家マルセル・ブルースト(1871-1922)の長編小説『失われた時を求めて』の中にでてくる逸話が有名であろう。ある意味で記憶をテーマにしたこの小説では、第一篇「スワン家のほうへ」の次の一節が食べ物と過去の記憶の例として広く知られている。場面は主人公「私」がある冬の日に、陰鬱な気分で外から帰宅すると、母から紅茶をすすめられるところである。

なにげなく紅茶を一さじすくって唇に運んだが、そのなかに柔らかくなったひとかけらのマドレーヌがまじっていた。(略)お菓子のかげらのまじったひと口が口蓋にふれたとたん、私は身震いし、内部で尋常ならざることがおこっているのに気づいた。(略)えもいわれぬ快感が私のなかに入りこみ(略)この強烈な喜びは、いったいどこからやって来たのだろうか?(略)すると突然、思い出が私に立ちあらわれた。その味覚は、マドレーヌの小さなかけらの味で、コンブレ(「私」が幼少時過ごした町の名前)で(略)日曜の朝、叔母の部屋に行くと、叔母はそのマドレーヌを紅茶やシナノキの花のハーブティーに浸して私に出してくれたのである。

『失われた時を求めて』は、一つの菓子を契機に主人公(おそらく作者自身)が家族や町全体の記憶を鮮明に蘇らせ、物語が展開していくという構成の小説である。150万語、全7巻から成るこの大作文学は、実に小さなマドレーヌから生まれたものなのである。

食べ物の力というのは、人に栄養を与え、体力の源となるだけではない。前述のように食べ物は過去を蘇らせたり、人の感情を動かしたりする別の大きな力も持っている。また実際に、食を通じ呼び起こされたこの過去は、我々の現在・未来両方ともを形づくる役割も果たしている。

最近まで、食と記憶はそれぞれ独立した研究テーマとして扱われてきたのだが、近年は「記憶における食」や「食の記憶」というような学術論文テーマも度々扱われるようになり、両テーマを一つの研究として結び付けるような著作も頻繁に見かけるようになった。

当論文では、そのような食と記憶を組み合わせた研究について考察を行なっていく。まず初めは食の研究にとって重要とされる記憶研究の基礎的な理論を紹介し、次に食と記憶両方を視野に入れた代表的な研究を考察し、最後に食と記憶の研究において有望な課題である忘却について触れ、全体として食と記憶の研究の現状と展望について述べていきたい。